

海外レポート

シンシナティ小児病院留学記 —Think Globally, Act Locally—

沖縄県立中部病院小児科・琉球大学大学院医学研究科 臨床研究教育管理学講座
吉 年 俊 文

1. はじめに

「より良い小児科医になるためにはどうしたら良いのか？」

これは医学生時代からの私の命題です。アメリカに留学し、異国の地で幅広い知見を得て、最新の技術とグローバルなネットワークを構築できれば、より良い小児科医に近づけるのではないかと思うに至りました。これは初期・後期研修を過ごした沖縄の県立病院で、過去に北米に留学されたことのある指導医たちと出会えた影響が大きかったと思います。当時の私にはその指導医たちがとても眩しく格好良く見え、彼らのように海外留学で切磋琢磨することで、子どもたちにより貢献できるのではないかと思ったのです。今回、私は小児消化器・肝臓分野で、アメリカにあるシンシナティ小児病院に2018年から2年間留学しましたので、その報告をいたします。

2. 小児消化器・肝臓分野との出会いから留学まで

私は卒後9年目でアメリカに留学しました。留学するには少し遅い渡米時期となりますが、そこには尊敬する指導医から頂いた「アメリカ留学がゴールではないよ。帰ってきてから沖縄や日本の小児医療に何を貢献できるかを考えてから留学しなさい」という言葉を踏まえ、自分の納得できる留学時期を考慮したためです。

当時、沖縄県立中部病院のスタッフであった岩間達先生のもとで、後期研修の最終年に小児消化器・肝臓分野という専門分野に出会うことができました。この数年増加している炎症性腸疾患（クローン病、潰瘍性大腸炎）や沖縄で多い非アルコール性脂肪性間疾患（NAFLD）をなんとかしたいという展

望があり、また、消化管内視鏡検査や肝生検などの手技があり、小児科医として必須の栄養の勉強ができること、それに急性期から慢性期にいたるまでの様々な疾患に関与できることが非常に魅力的でした。

さらに小児消化器分野により想いが強くなったのは、成人消化器内科で研修中に、ピロリ菌陽性の若年胃癌患者さんに出会ったことです。その方は20代後半の1歳児のお母さんでした。育児が大変で、自身の胃痛を我慢して、ようやく来院された時にはstage IVの胃癌で手遅れとなっておりました。現代の日本ではピロリ菌は5歳未満に家庭内感染する小児科の疾患です。他県で中高校生に対するピロリ菌検診が動き出している昨今、小児科医がもっと内視鏡検査に身近になっていけば、小児科医で内視鏡検査を気軽にしてくれる存在がいれば、このような悲しい事態を未然に防げるのではないかと思ったのです。これらの理由で私は自分が最も貢献できる分野を小児消化器・肝臓分野とし、また、USMLEというアメリカの医師国家試験をSTEP 3まで取得し、アメリカへ留学する下地を作りました。

そうして、まず国内で小児消化器・肝臓分野のトレーニングを受けました。その指導医から言われた視点が、私の人生を更に一歩前に進めてくれました。「本でエビデンスを学んでばかりいないで、自らエビデンスを出す側になりなさい。エビデンスを発信することで日本の小児医療はより良くなるはずよ」という言葉です。私にとってこの言葉の影響はとて大きく、臨床研究をしっかりと学び、研究結果を発信することで日本に、沖縄に貢献したいと思うに至りました。

3. シンシナティ小児病院消化器肝臓部門への留学

2018年9月から2020年8月までの2年間留学する機会を得ました。シンシナティ小児病院は全米小児病院ランキングでも毎年3~5位ほどの名門病院(2018年当時は全米2位の小児病院)であり、消化器分野は全米1位の施設でした。留学のきっかけは、その施設で小児肝臓移植内科医として勤務している日本人医師に私から突然メールを送ったことから始まりました。この先生は、出会ったこともない私のメールを読んで、私が興味のある分野の教授を紹介して下さいました。そしてトントン拍子で留学は決まりました。これはこの先生が周りの先生から信頼されているため起きた稀な決まり方だと思います。

ご紹介いただいたメンターとなる教授や准教授に私の留学目的や内容を話すと私の留学の意図を認めてくださり、クリニカルフェローと同じようにカンファレンスに出席すること、Nutrition Support Teamに帯同すること、肝臓外来に参加すること、興味のある症例があれば病棟で診療をすること、そしてNAFLDの臨床研究にたくさん関わることを承認して戴きました。

この留学中に得たことが大きく3点あります。1つ目は、非常に優秀なフェロー達やスタッフに出会えたことです。彼らは皆人柄もよく、私の指導医としてのロールモデルとなりえました。2つ目に、将来有望でやる気のある同年代の日本人研究者の方々と出会うことができました。彼らは将来教授になるような学術的にも人格的にも素晴らしい方々でした。3つ目に、筆頭著者として10ほどの原著論文を書く機会を頂き、COVID-19流行前はサンディエゴ、シカゴ、ボストンなどへ学会発表に行けたことです。論文としては、*Pediatrics*や*Journal of Pediatrics*など日本にいては到達できなかったようなジャーナルにも筆頭著者として掲載することができました。

4. シンシナティでの生活

シンシナティはオハイオ州の南に位置する緑豊かな素敵な土地でした。野球ではシンシナティ・レッズ、アメフトではベンガルズといったスポーツも盛んで、Kids first、Baby firstの地でもありました。

私たちは生後2か月の長男を連れて留学しました。慣れない土地で、アパートの周りには日本人がいない環境であり、妻は長男と2人きりのためとても寂しい思いをさせるに違いないと思っておりました。ところが、妻が乳児を連れながら、毎日行くスーパーでは「How beautiful!」「Let me hug him!」など、毎回店員だけでなく、周りの客からも声をかけてもらいました。また時には妻が身振り手振りで育児の大変さを伝えると、「この時期は夜泣きがすごいよね。大変よね、分かるわ。でも必ず乗り切れるわよ。困ったら、私の家に来なさい」など、同じアパートの方々にも優しくしてもらえることで、妻は孤独を感じる機会はほとんどなかったと言ってくれました。妻はそこまで英会話は得意でなかったのですが、シンシナティの方々には根気よく話に付き合ってくれたようです。図書館ではママ友ができ、一緒にランチに行き、アメリカ文化を学ぶために教会にも行くようにもなりました。シンシナティは沖縄のように、社会で子どもを育てるとい文化、社会で親を孤独にしないという配慮が築かれた土地だったので。また、アパートの隣人は日本食を作る代わりに、妻の英会話の講師になってくださり、アメリカの文化や医療体制を色々教えてくれました。実はその方はシンシナティ小児病院感染症科の准教授でもあり、最後まで私たちの家族にとってもよくしてくれました。帰国2か月前には次男も出産でき、家族にとっても最高の生活を送ることができました。COVID流行中のため、出産2か月前から出産後1か月ほどは自宅にいて、妻の大変さ、長男・次男と過ごす時間、出産前から出産後の手続きなどを妻と共有することで、小児科医として大切な体験もできました。

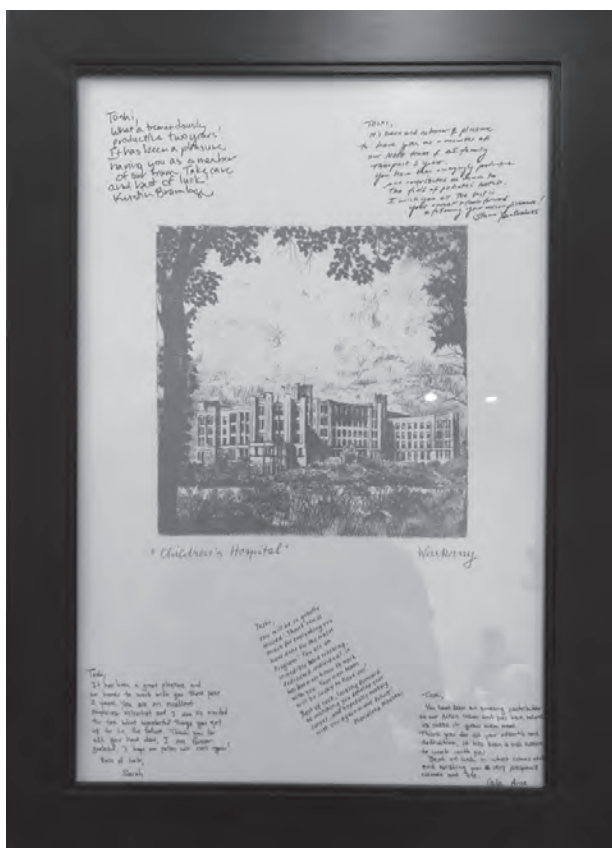
一方で、地域と一体化できる瞬間はCOVID流行前でした。流行後は、地域で暮らす人との交流は難しくなりました。「Social distance」ではなく、地域との接触はそのまま「Physical distance」をとることが生活弱者にとっては重要であることを、身をもって学びました。

5. 帰国後の展望

「渡米することでより良い小児科医になれるの

か？」この答えはまだ模索中です。ただし、留学をしたことでそのヒントは得ることができました。それは、「Think Globally, Act Locally」です。海外からの最新の知見をアップデートし続け、自らの知見を論文で発表することは、将来的な患者のために非常に重要であり、沖縄の小児医療で伸ばす余地のある部分です。しかしそれだけでは足りません。私が出会った県立病院の指導医たちのように、患者のいるコミュニティで、患者とコミュニティから必要とされることを活動し続けることが、さらに重要だと思ふように至りました。この事実は留学しなくても分かることかもしれません。しかし、留学して外から沖縄の小児医療を見つめ直したことで、コミュニティで先導し続けた先代の指導医たちの偉大さを知ることができました。

「渡米後、沖縄県の子ども達に何ができるのか？」これは私の最大のミッションだと思っています。私が小さい頃は日本一の長寿県であった沖縄県は、今



教科書で有名なNelsonが当時過ごしたシンシナティ小児病院の写真と、お世話になったボス達からの寄せ書き。

や65歳未満の働き盛りの年齢調整死亡率は日本最下位です。これは日本で最も悪い肥満率など、生活習慣病が関連していると考えられます。渡米中の私の研究テーマは子どものNAFLDでした。所謂、肥満に伴う脂肪肝です。これには、貧困、シングルの親、食事内容や食事時間、睡眠習慣、スクリーンタイム、運動内容など、多くのリスク因子が関わっています。どれも沖縄の親や子ども達にとって重要な課題となっていることばかりです。これを私なりになんとかしたいと考え、「沖縄の幼児肥満」について科研費を取得できました。アカデミックなアプローチと、その結果をもとにした多職種連携で、子どもからの肥満対策に取り組んでいきたいと考えています。

6. 謝辞

渡米にあたって、私を医師として育てて下さった沖縄県立病院の先生方をはじめ、看護師ほか医療スタッフ、患児とそのご両親に心より御礼申し上げます。特に、沖縄県立中部病院 安次嶺馨先生(当時)、小濱守安先生(当時)、金城さおり先生には、いつも温かいご支援を頂き深謝申し上げます。



左からMarialena准教授、私、Stavra教授、クリニカルフェローと。